



大宮見沼

よみさんぼ
第19号

写真家 野口勝宏

やどかりの里発！ 地域発見マガジン

特集

100年後の未来へつなぐ見沼の自然

編集 公益社団法人やどかりの里「大宮見沼よみさんぼ」編集委員会

特集

100年後の未来へつなぐ 見沼の自然

秋の見沼にユネスコ未来遺産調査団訪れる (2014年10月26日)

さいたま市と川口市にまたがり、見沼の風景に代表されるのは、1,260ヘクタールという広大な緑地空間、見沼田んぼ。本誌創刊号では、その保全活動を集めました。今回は「見沼100年構想の会」の活動を牽引してきた水野晶子さんをご紹介します。さいたまーチ〜見沼ツアーウォーク〜^注に参加したやどかりの里の浜砂会（家族会）の松川慶子さんが橋渡しをしてくださいました。



水野 晶子さん

(見沼100年構想の会世話人)

貴重な自然を後世に

現在40名を超える会員がいるという見沼100年構想の会。発足は今から13年前に遡ります。

「さいたま市の貴重な自然を後世に伝えたいと、パノラマ風景画家友利宇景さんと思いを同じくする人たちで、2003(平成15)年4月に発足しました。ちょうど政令指定都市さいたまが誕生した年です。実は友利さんは私の同窓生。もともと浦和育ちで、自分の暮らす場所しか見えていなかった私は、ほんの15分自転車走らせればたどり着く見沼田んぼのことも知りませんでした。見沼の地に多くの宝があること、とてもいい場所だと気づかせてくれたのが友利さんだったのです。彼は都心近くに広がる見沼田んぼの壮大な自然について『合

注) 見沼田んぼなど自然に親しみ、豊かな心と身体健康づくりを目指すウォーキングイベント

併記念にこんな素晴らしい場所があることを描きたい』と話していました。そうして3年半かけて描かれたのが『見沼スーパー・パノラマ鳥瞰図』です(写真)。これは会の発足前から描き始め、2003年に完成しました。たとえば2002(平成14)年に完成した埼玉スタジアムなど、当時の段階で描けるものはすべて描かれています。100年経った時、さいたま市の貴重な財産になるのではないのでしょうか」

1枚のポストカードがつなげた縁

100年構想の会を含め、見沼たんぼ地域に関係する20の市民団体や農業者、教育機関等で構成する「未来遺産・見沼たんぼプロジェクト推進委員会」の活動は、2014年度の日本ユネスコ協会連盟による「プロジェクト未来遺産」に認定されました。これは、地域の豊かな自然や文化を100年後の子どもたちに残そうと、地域の市民団体の活動を登録するプロジェクトです。

100年構想の会では、記念として見沼スーパー・パノラマのポストカードを



増刷しました。この鳥瞰図は、その緻密さと正確さで、教育図書出版第一学習社の高校教科書「地理 A 世界に目を向け、地域を学ぶ」にも掲載されています。教科書採用につながったのは、会の活動の1つである「さいたまーチ〜見沼ツアーウォーク〜」がきっかけでした。

「さいたまのことを知ってもらおうと、見沼ツアーウォークで鳥瞰図のポストカードを配ったところ、それを受け取った方との縁で、教科書で掲載されることになったようです。500枚近く配りましたが、その中の誰か1人の心にも響いたのなら嬉しい」と水野さんは顔を綻ばせます。

他にも100年構想の会では、「埼玉県立近代美術館を囲む緑の再生プロジェクト」として、北浦和公園の環境整備も行うなど精力的に活動をされています。

知力・行動を駆使した市民活動を

最近では「未来遺産・見沼たんぼプロジェクト推進委員会」として、見沼の将来展望についてさいたま市議会から意見を求められたそうです。「市民1人1人の活動を活かしていく道ができたのでは……」と水野さんは確かな感触を得ています。まさに市民運動の力を発揮した成果といえるでしょう。

「戦後、私たちは民主主義がどういうものか、肌で感じながら育ってきました。闘うことではなく、行政とも意見を交換し合い、協力を得ていく姿勢で市民活動を展開させることが大切ではないでしょうか。現実問題をいかに解決していくか、そうした知力・行動力が必要だと思っています」

ここ見沼の地は、100年後の未来に残したい自然や文化、たくさんの宝であふれています。その宝を守り続ける人たちが多くいることも実感しました。本誌では、今後もそうした地域の活動をお伝えしていきます。(記 萩崎 千鶴)

コラム



埼玉にゆかりのある人物に着目し、その活動を伝えた『いま埼玉を生きる』(埼玉日報社、2008)。取材されているのは水野澄夫さん。水野晶子さんのパートナーだ。元埼玉県知事畑和氏の私設秘書を長く務めた澄夫さんは、培った人脈を活かしながら埼玉の宝を発信している。こうした活動が100年構想の会を支えている。

よみせんぽ 日誌

見沼の思い出



『写真アルバム さいたま市の昭和』（いき出版）より

私にとっての見沼は、大宮の寿能城跡あたりの見沼代用水と、そこから見たずっと昔の風景です。植竹町の南端にある私の家から、盆栽町を通って東へ行くと、まもなく見沼代用水西縁の土手に出ます。小学生の頃には、そこまで母とヨモギやノビルを摘みに行きました。昭和30年代前半のことです。まだ柵も遊歩道もなく、土手を歩くことも水の流れを見ることもできました。

でも、私と見沼とのほんとうの出会いは、50年くらい前、大宮北中の生徒だった時のことでしょうか。学校から見沼用水までは10分もかかりません。放課後スケッチに行き、用水西側の台地の、少し高いところで画帳を広げました。

用水の東側は低くなっていて、ずっと向こうにある台地の林まで、見晴るかす緑の原野という印象でした。まだ大宮第2公園も市営球場もなく、人家もまばらに農家があるくらいで、今よりずっと広く奥深く感じられたのです。台地の林の先は住宅地だったはずですが、林のずっと奥の奥までこの緑の風景が続いているのではないかと、そう思わせるような深遠な気配が見沼にはありました。

高校に入学して間もなく、スケッチをした辺りで行われた発掘に参加しました。奈良時代の竪穴式の住居跡です。初めての発掘体験だったので、すぐにへろへろになってしまいましたが、これがきっかけで、土に触れる喜びを知ったように思います。その後、就職するまでの数年間は、休みのたびに泥だらけになっていました。スコップを使う技術にはちょっと自信があります。そして、春の雨上がりの日、土の匂いがすると、今でも少し幸せな気持ちになるのです。

上の写真、右は1960（昭和35）年頃、左は現在の同じ辺りから見た見沼の風景です。私が子どもの頃は、まだ周りに自然がいっぱいありました。でも、見沼はそういう身近な自然とはちょっと違った、龍がいるといわれたら信じてしまいそうな、自然への畏怖をも覚える場所だったのです。（記 並木せつ子）

さいたまの匠

山崎 光夫さん

(株式会社山崎工務店代表取締役会長)



山崎光夫さんは、1995年度、現代の名工として労働大臣表彰を受けました。「磨き上げた技能に工夫を加え新しく編み出した技法を後進に伝え、世に貢献することを喜びとしている人々」を名工として表彰するものです。山崎さんは、^き規矩術（後述）に優れ住宅のほか寺社仏閣の特殊建築において技能を発揮したこと、鴨居取付拡張器の考案で作業効率向上に貢献したことが受賞の理由です。

自分の一生はこの地にあり

山崎さんは1937（昭和12）年1月、秋田県の八郎潟に注ぐ井川の農村で生を受けました。大工職人だった父親のもとに見習い弟子として入門し、技術を習得していきます。やがて北海道で出稼ぎ労働者として働き、この時の先輩から誘われて大宮にやって来たのは1956（昭和31）年でした。まだ2月だというのに、青空が広がりとても暖かく、雪国秋田で育った山崎さんには驚きでした。同時に「自分の一生はこの地にあり」と心に誓い、今日に至るのです。

後進の育成に尽力

やがて東京オリンピックを控えた日本では、関連施設の建設ラッシュを迎えます。また、住宅金融公庫の貸し出しの始まりで建築技能者不足が予想できました。1963（昭和38）年、大宮市でも建築技能工を養成する大宮建設高等職業訓練校が開設されました。山崎さんは職業訓練指導員として講師を務め、その後は副校長、校長などを歴任し、延べ35年間、訓練校で後進の育成に関わりました。

「師匠から弟子へ口伝で継承していく徒弟制度では、教え切れないことも多い。ある意味閉鎖的な世界なので、挫折する人もいます。各事業所での作業(実

習)と訓練校で建築概論や製図、法規や安全衛生など学科を習得し、3年間で技能工となる訓練校です。機械化、大量生産を行う住宅建築の現場では教えられない伝統工法を学べることが訓練校の強みです」と山崎さん。また、1965(昭和40)年には(株)山崎工務店を設立し、大工職人から経営者としても活躍の幅を広げ、ロータリークラブや大宮法人会など公益的活動にも携わります。

よい仕事を追求できる楽しみ

さて、山崎光夫さんを語る上で欠かせないのが、「規矩術」でしょう。「孟子」の『規矩準繩を正す』に由来する「規矩準繩」とは、工匠の大切な道具です。「規」は円をつくるコンパス、「矩」は方形をつくる曲がり金、「準」は平らを測る水盛り、「繩」は直をなす墨繩を表します。規矩準繩が正しいこと、そして使う人間の心も正しく、道具と一体となった時に建築物は正確になると考え、高度な技能といわれる規矩術について長年研究を重ねてきました。その研究が数多くの寺社仏閣の伝統建築物の施工につながるのです。さいたま市内では宮前山興徳寺本堂、南中野山正法院庫裏、柏市の妙蓮寺書院・庫裏などを手がけました。

「寺社の建築はよい仕事を追及できるのが楽しみでした。重要なのはどの木を使うか、そして道具です。例えば檜は硬く耐朽性に優れているため、中途半端な技術では鉋で削ることができません。ある時は山形に直接檜を買いつけに行きました。立ち木は水を含むので、材木として使えるまで乾燥に7~8年ほどかかります。ころがして樹皮は虫が食べ、使える中心部分は15cmから20cm、癖をとりようやく木目も美しい、びくりともしない寺が作れるのです。どの材木を使うかは私の責任です」と当時の建築の様子を熱く語ってくださいました。

来年傘寿を迎える山崎さん。「体力・気力が衰えると物事への対応が粗末になるので一線は退く」と決意されているようです。当面の目標は3万日生きること(82歳と70日)と仰いますが、「この地にあり」と決心した地元さいたままで、これからも何かを生み出されていくのではないのでしょうか。

(記 浅見 典子)



興徳寺本堂

あの街
この街

俊一郎が行く・13

「そのクルマ」

机では思いつかない

こんにちは！ 文章の書き出しにはいつも悩みます。いい書き出しが湧いたと思っても、どこかで読んだものの真似だったり……そして、仕事をしているうちに忘れてしまいます。そんなことを繰り返し、逃避したくてクルマに乗る。オーディオが壊れたクルマに乗って、無心に走るうちにまとまってきます。

20年オチ、17万キロ

そのクルマ、中古で10年前に手に入れた時から既にくたびれていたボディもむしろ好印象で、気負いを感じません。しかし、2人乗りの狭い車内、雨漏りのする幌、馬力が喰われるのでつけないエアコン、乗り心地の悪さに同乗者の不評を常に買う。欠点をあげればキリがない。20年オチだけれど、エンジンを掛けるのに特別なことはいりません。キーをまわし暖気運転をする間に屋根を開ける。ギアをつないで走り出せば、ちょっとした非日常が待っています。

一体感が心地よい

子どもの頃からタイヤのついた乗り物が好きでした。中学生でお小遣いを貯めて買ったロードバイクは、それまで想像の対象でしかなかった街並みの広がり、近くの川が海に注ぐ風景などを見せてくれました。そして、走る・止まる・曲がるという基本的な機能に必要なものを吟味し、その尺度にはまらないと思う部品を外してみたり、違うものに変換しながら、前よりも自転車と自分が一体になっていく感触を楽しんでいたのです。自転車に夢中になったことと同じくらい、クルマの構造に対する興味も増



とまつりしゅんいちろう
都祭俊一郎

1975年生まれ。生まれも育ちも、東京の下町。
エンジュの新築の他、保育園や幼稚園の設計（新築及び改修）
を複数行う。（写真 新 良太）



していきました。

夏の夜を走る

装飾を排除して目的に特化したものが見せる機能美。道具を選ぶ時や自分自身が建物を考える時でも、できることなら機能に徹し、美しいものであって欲しい。身近な商用車も、そんな目線で見ると派手なスポーツカーと同じくらい興味深い。そしてある時、縁あって手元に來たのが、その小さなクルマでした。

1, 2, 3とギアをつないでいく。馬力がないので、小刻みにギアをつないでリズムよく走る。首都高に乗ると、自分や周りのクルマから発せられる騒音の洪水とともに上下左右と風景が変わっていきます。橋桁、外灯、そして道路のつなぎ目など、さまざまな路上の構造物が目に入る。昼間は圧倒的な存在感があるビルや工場も、点々とした明かりとともに、その規則性を示してくれます。川を何本か越えるごとに気温が下がっていくことを、そのクルマに乗って初めて知りました。だんだんと街の明かりもまばらになってくる。適当に見晴らしのよいところを見つけて、エンジンを切る。突然、静かになり澄んだ空気も気持ちいい。

ほどほどに

快適さや便利さは、そのクルマでは得にくいかもしれません。大抵、ものの形はすべてを満たすことは難しい。より多くを満たそうとすると平凡になってしまいます。何かを得て、何かを捨てることで、モノは研ぎ澄まされていく。あとは、受け手の寛容さが試されます。私の場合は、こうして移動する喜びを得ているのです。

最近疲れ目になりやすい自分に言い聞かせたい。スピードは、ほどほどに……





やどかりの里は自然栽培に取り組み始めました

<個性>自分が自分で在ること

<共生>自分が自分でいられること



「そのままの自分でいいんだ」という安心感は生きづらさを外してくれる。

やどかりの里は、安心して自分らしくいられる場所。

それは、「違って当たり前」があるから……。自然栽培とやどかりの里で感じる共通点。

「普通」ってなんだろう

同じ種類の野菜でも、大きさや色、育つペースもそれぞれ異なる自然栽培の野菜。

みんな同じほうが不自然であることを教えてくれる。

「規格」は誰かの都合によるもので、

「普通」も、社会や自分の過去の経験が作り上げた思い込みなのだと知る。



つながり

自然に寄り添うやどかり農園のメンバー。
穏やかな表情や他のメンバーを気遣う姿からは、キラキラとした輝き。
人とのつながり，自然とのつながり。
誰かの役に立てることや生かされていることへの気づき。
つながりこそが生きがいや幸せを感じさせてくれる。
つながりのない存在はない。決して一人ぼっちのいのちじゃない。



それぞれに役割がある

枯れ葉は落ちる前、自らに残るわずかな養分を枝に戻してから、土へと向かうのだそう。

調和のとれた自然界にムダなものはなく、
今ここで、それぞれがそれぞれの役割を担っている。

私たちも、自然の極々わずかな一部分。

人生のさまざまな経験は、愛を思い出すためのものなのかもしれない。



違うけれど、おんなじ

私たちは、それぞれ異なる存在だけど、

私たちはみな、生きてがっていた他のいのちの集合体。

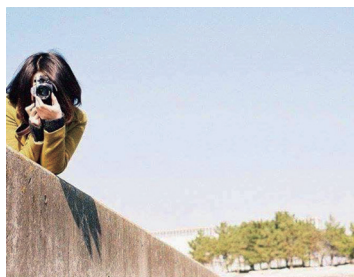
すべてとのつながりの中、ひたすらに生かされ、生きている。

共に生きる喜び。感謝の気持ちが、また愛へとつながる。





(写真・文 柿内未央)



いのちの大切さをつながり
伝えていきたい

柿内 未央さん (写真家)

やどかり農園の顧問、明石誠一さんが営む明石農園の研修生であり、写真家としても活動されている柿内未央さん。

「人間としてどう生きていったらいいか考えていて、たどり着いたのが農業です。『自然と共に生きる』という生き方が、本来の生き方だと感じました」と未央さん。現在では、明石農園ややどかり農園で自然栽培に勤しんでいます。

「スーパーに並ぶのはすべて同じ形の野菜。誰かにとって都合よく、規格にはめられた姿は、まるで人間社会の縮図のよう。自然栽培の野菜は、形は不揃いで育つペースもバラバラです。でも、それが自然で、個々の多様性を認め合う自然栽培は、メンバーがありのままに、自分らしくいられるやどかり農園と共通していると思います」

そんな未央さんにとって、写真は人とつながるツール。「写真を通じて、いのちの大切さをつながり伝えていきたい」と話してくれました。

(記 萩崎 千鶴)

インフォメーション

喫茶 ルポーズ



営業時間 月～金 10.00-17.00
さいたま市大宮区天沼町 1-136-2

募集

- ☆作品展示したい方
- ☆雑貨販売したい方
- ☆貸しスペースあります

詳細は ☎ 048-657-0202

天沼1丁目
大宮駅
喫茶ルポーズ
スーパーバリュー
○ 大宮天沼店

あゆみ舎が使用済み PC の回収を始めました！

不要になった PC・携帯電話・スマホを無料でご自宅へ引き取りに伺います。持ち込みも大歓迎です。データ消去作業は株式会社アンカーネットワークサービス (<http://www.anchor-net.co.jp/>) が責任をもって消去いたします。

問い合わせ先 あゆみ舎

〒 330-0804 さいたま市大宮区堀の内町 1-37-103 TEL 048-648-2555
受付時間 月～金 (祝祭日は除く) 9:00-18:00

埼玉県産小麦粉を使用 手づくりまんじゅう

まごころ

さいたま市中央区本町東 5-9-7
Tel. 048-857-2783 Fax. 048-857-2769



おいしく食べて
健やかに

栄養バランスのとれた
お弁当で食生活を支えます



昼食 1食 550円

月～金、1食からお届けします！

- *おかゆや刻み食も対応します
- *ご希望の曜日にお届けします

エンジュ TEL 686-7875

<受付>月～金 (祝日を除く) 8:30～18:00

インフォメーションコーナーの
掲載広告を募集しています！

1マス (64mm*46mm) 5,000円

すべての人々が人間らしく豊かに育ちあえる地域づくりをすすめるために
こうぬまふくしかい

社会福祉法人 鴻沼福祉会

こころを込めた手づくりの品をぜひご賞味ください！

つばさ共同作業所・とめや共同作業所

いちず
とうふ屋 一豆
TEL 048-854-8000
FAX 048-854-3538
さいたま市中央区上緑2-10-20

つばさ共同作業所ととめや共同作業所が手がける、
国産・手づくりこだわった本格とうふ。
富城県産高級大豆「ミヤギシロメ」を
100%使用しています。
大豆本来の濃厚な甘さとコクを味わえる
“小さなせいたく”を食卓にお届けします。



きりしき共同作業所のパンは食の安全・安心に
こだわり、原材料に国産小麦粉を使用しています。
(一部商品を除く)
この道30年の職人とともに手がけるパンは、
少し懐かしい味と香りがします。

きりしき共同作業所

きりしきのパン

TEL 048-854-6910
FAX 048-854-6942
さいたま市中央区円阿弥1-3-15
鴻沼福祉会館内

とめや共同作業所

弁当屋 いちず
TEL・FAX 048-684-1257
さいたま市見沼区桑台2-145

弁当屋いちずのお弁当は、忙しい毎日を
過ごす方たちに1食でもバランスの良い
食事をしていただきたいと、
副菜や小さなおかずにも野菜をたっぷりと
使って作っています。



鴻沼福祉会から読者の皆様へ

鴻沼福祉会では、資格・経験相対して作業や清掃作業、
資源回収など、地域の企業様のニーズに応えるべく様々な
仕事を受注しています。

働くことをとおして障害のある人がさらに輝けるチャンスを求めて
新しい仕事にもチャレンジしつづけています。

障害のある人たちの就労支援、生活支援、
相談支援のスタッフを募集しています！

お問い合わせ先：048-854-6890 (担当オガワ)

鴻沼福祉会事業所一覧

●本部・事務局 埼玉県さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内 TEL:048-854-6890 FAX:048-856-0313

《はたらく》●つばさ共同作業所(中央区) ●あざみ共同作業所(見沼区) ●とめや共同作業所(見沼区) ●きりしき共同作業所(中央区)
●さいたま障害者労働センター(朝川市)

《くらす》●第1たかさご荘 ●第2たかさご荘 ●第3たかさご荘 ●かえでホーム ●かりんホーム ●よつぱりハイツ
●なつめホーム(以上、中央区) ●のぞみホーム(見沼区)

《ささえあう》●中央区障害者生活支援センター来夢 ●地域活動支援センター来夢(以上、中央区)
●見沼区障害者生活支援センター来人(見沼区)

大宮見沼よみさんぽ

作者紹介

写真家 野口勝宏さん

のぐちかつひろ／猪苗代町生まれ。写真家。東日本大震災を機に「福島の花の美しさで世界の人々を笑顔にしたい」と「福島の花 Flowers of Fukushima」シリーズを制作。福島県観光キャンペーン「福が満開、福のしま」においてはJR東日本のメインイメージに採用され、駅構内・車両を花で彩る。全国各地での写真展開催のほか、病院や福祉施設などでの展示も手掛ける。また、2016年5月より国内就航を開始したANAの復興支援「東北 FLOWER JET」の機体を福島や東北の花々でデザイン。全国に明るさを届けたいと活動を続けている。野口勝宏オフィシャルサイト <http://noguchi.photo>

表紙：椿とコセンダングサ

木と春が寄り添う花

冷たい風からかばってくれる

かたい葉の優しさに触れながら

冬の花としての強さを確かめている

題字 宗野文さん

学生時代から書道が大好きで、子育て中の今、我が子とともに習字に再挑戦中。やどかりの里の作業所「すてあーず」所長。見沼区南中丸在住。

大宮見沼よみさんぽ 第19号

発行 2016年10月（秋号）

編集 「大宮見沼よみさんぽ」編集委員会
〒337-0026 さいたま市見沼区染谷
1177-4

Tel 048-680-1891

Fax 048-680-1894

E-Mail johokan@yadokarinosato.org

<http://www.yadokarinosato.org/>

発行 公益社団法人やどかりの里

理事長 土橋敏孝

印刷所 やどかり印刷

公益社団法人やどかりの里は、この大宮見沼界隈で障害のある人たちとともに地域で生きることを目指して活動を続けています。私たちは長年この地域で活動し、地域の皆さんに支えていただけてきました。

そして、この地域の人々が織りなしてきた歴史・文化、守り育ててきた自然、地域に根づいた事業等々をもっと知りたいと思うようになりました。合わせて、やどかりの里のことも皆さんにもっともっと知っていただきたいと「大宮見沼よみさんぽ」を創刊いたしました。

「大宮見沼よみさんぽ」編集委員一同